

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区気象台

地域火山監視・警報センター

鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引下げ＞

口永良部島では、4月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7月頃から減少し、少ない状態で経過しています。また、その他の観測データにも活動の高まりを示す変化は認められません。

これらのことから、新岳及び古岳の火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（19日）11時00分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。

【防災上の警戒事項等】

活火山であることから、新岳及び古岳の火口内では、火山灰等が噴出する可能性があります。また、新岳西側割れ目等の地熱域では、高温の噴気や火山ガス等に注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

口永良部島では、4月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7月頃から減少し、少ない状態で経過しています。振幅の大きな火山性地震は発生していません。火山性地震は主に古岳火口付近で発生しており、新岳火口付近においても地震活動が継続しています。

新岳では、8月以降は白色の噴煙が最高で火口縁上 400mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした。

9月7日から9日にかけて山麓及び山上で実施した現地調査では、新岳及び古岳の火口内や周辺の地熱域を引き続き確認しました。新岳と古岳の周辺の状況及び噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。

火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2024年8月以降、概ね少ない状態で経過しています。東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、8月以降は1日あたり20～70トンと少ない状態でした（8月30日の観測では1日あたり20トン）。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

噴火警戒レベルの判定基準表については気象庁ホームページを御覧ください。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/filing/level_kijunn/keikailevelkijunn.html

GNSS 連続観測では、2023 年 6 月下旬頃から同年 10 月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されていますが、その後更なる膨張を示す変化は認められません。

これらのことから、新岳及び古岳の火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（19 日）11 時 00 分に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを 2（火口周辺規制）から 1（活火山であることに留意）に引き下げました。

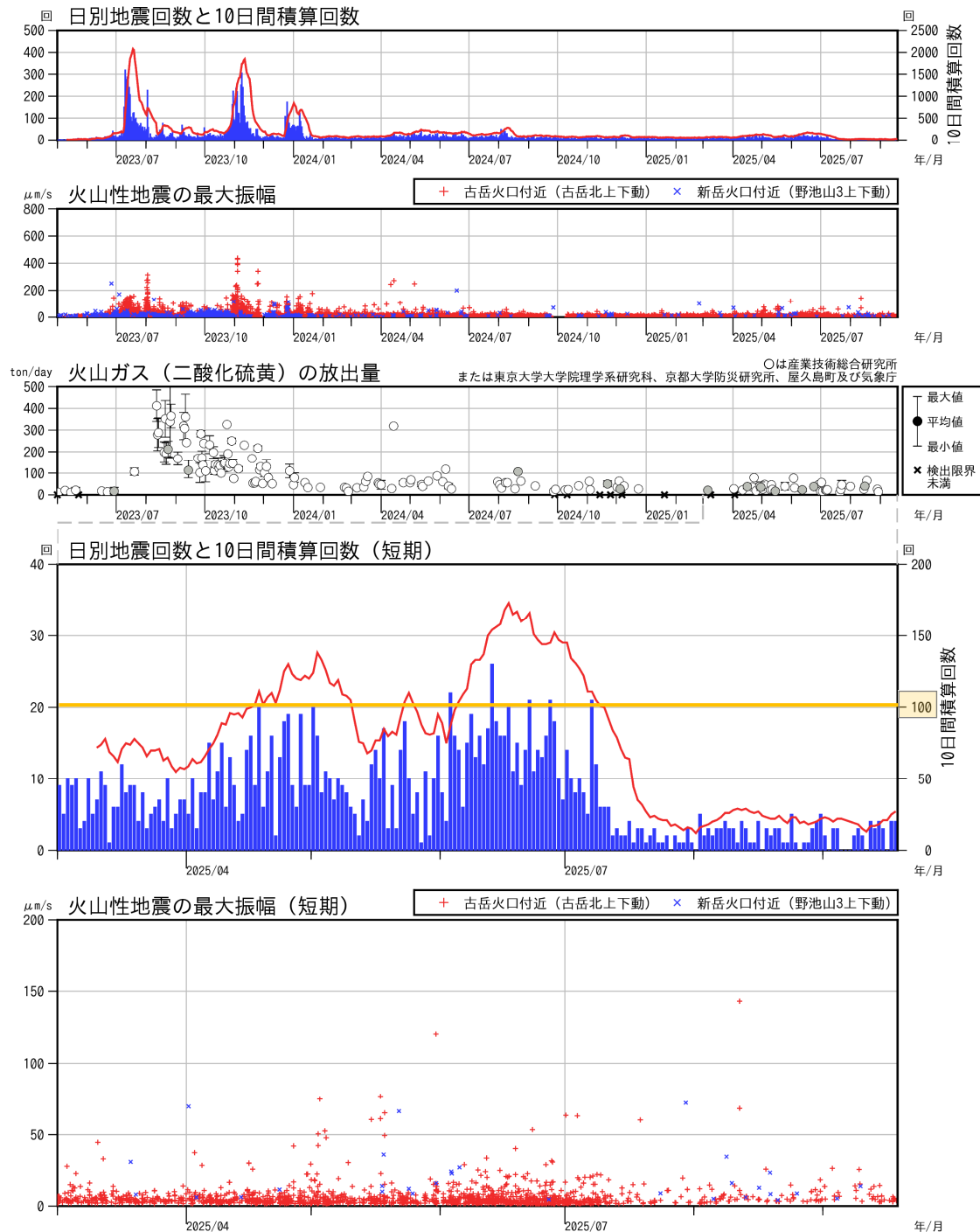


図1 口永良部島 火山性地震の発生状況と火山ガス（二酸化硫黄）の放出量
（1～3 段目：2023 年 5 月 1 日～2025 年 9 月 18 日、4・5 段目：2025 年 3 月 1 日～9 月 18 日）

- ・ 4 月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7 月頃から減少し、少ない状態で経過しています。振幅の大きな地震は発生していません。
- ・ 東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、8 月以降は 1 日あたり 20～70 トンと少ない状態でした（8 月 30 日の観測では 1 日あたり 20 トン）。

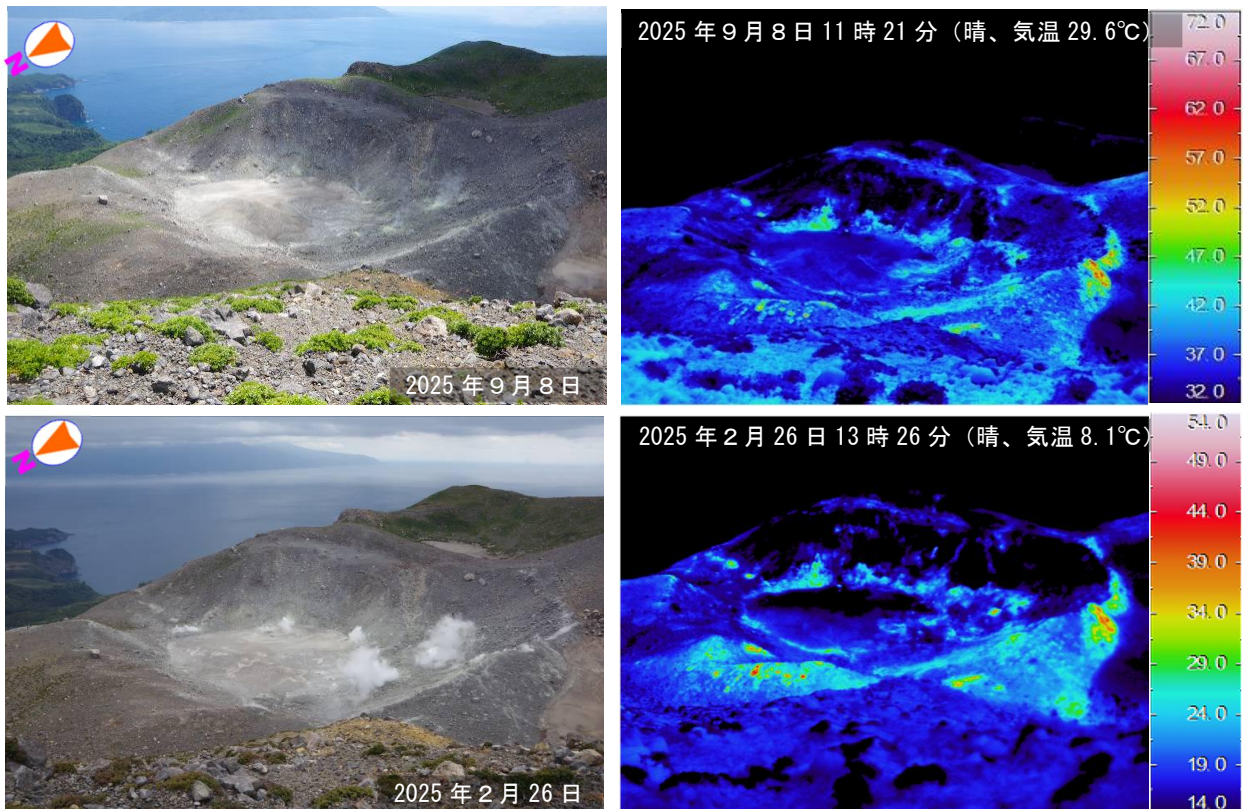


図 2-1 口永良部島 古岳火口内の状況（古岳山頂より撮影）

9月7日から9日にかけて山上で実施した現地調査では、古岳火口内で噴煙及び地熱域を確認しました。噴煙及び地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

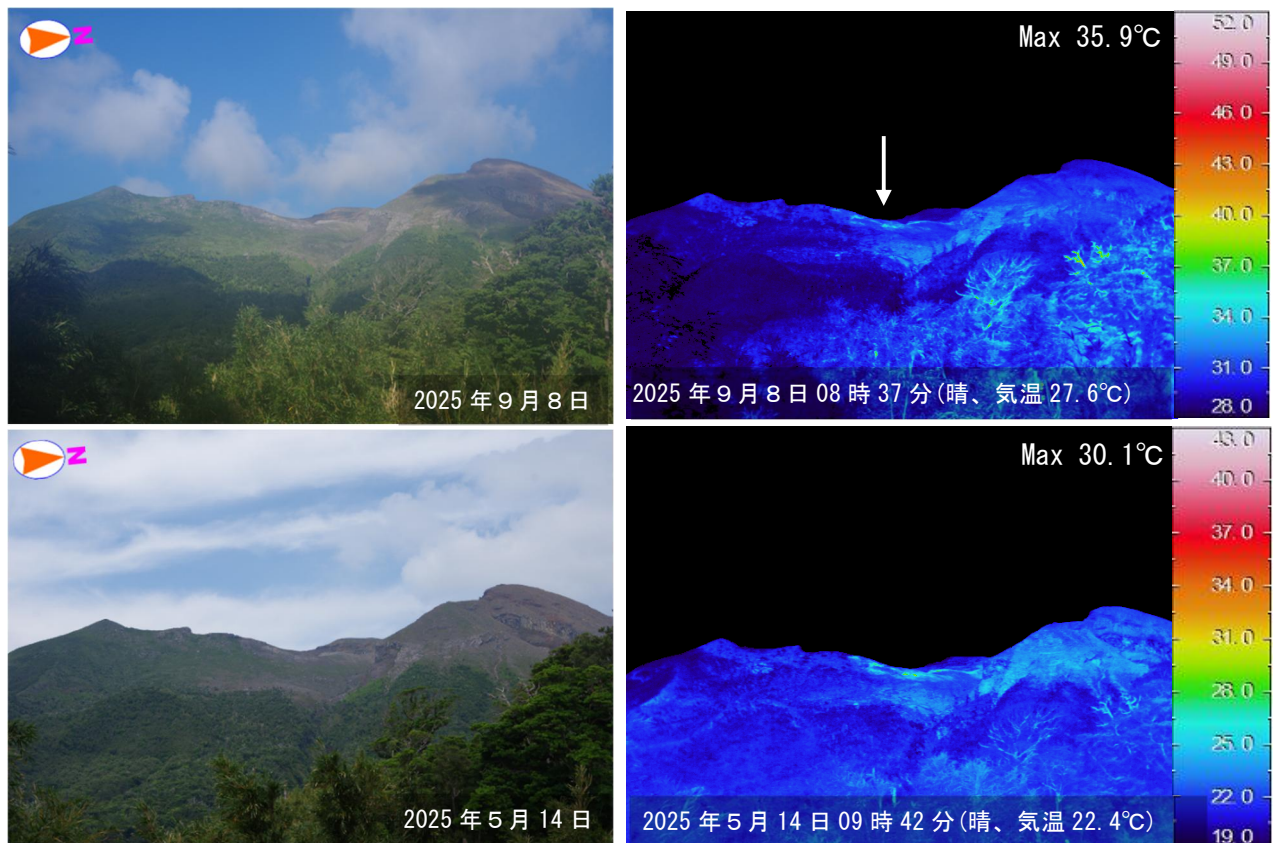


図 2-2 口永良部島 古岳周辺の状況（七釜（周回道路）から観測）

9月7日から9日にかけて山麓で実施した現地調査では、古岳火口周辺において地熱域（白矢印）を引き続き確認しました。地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

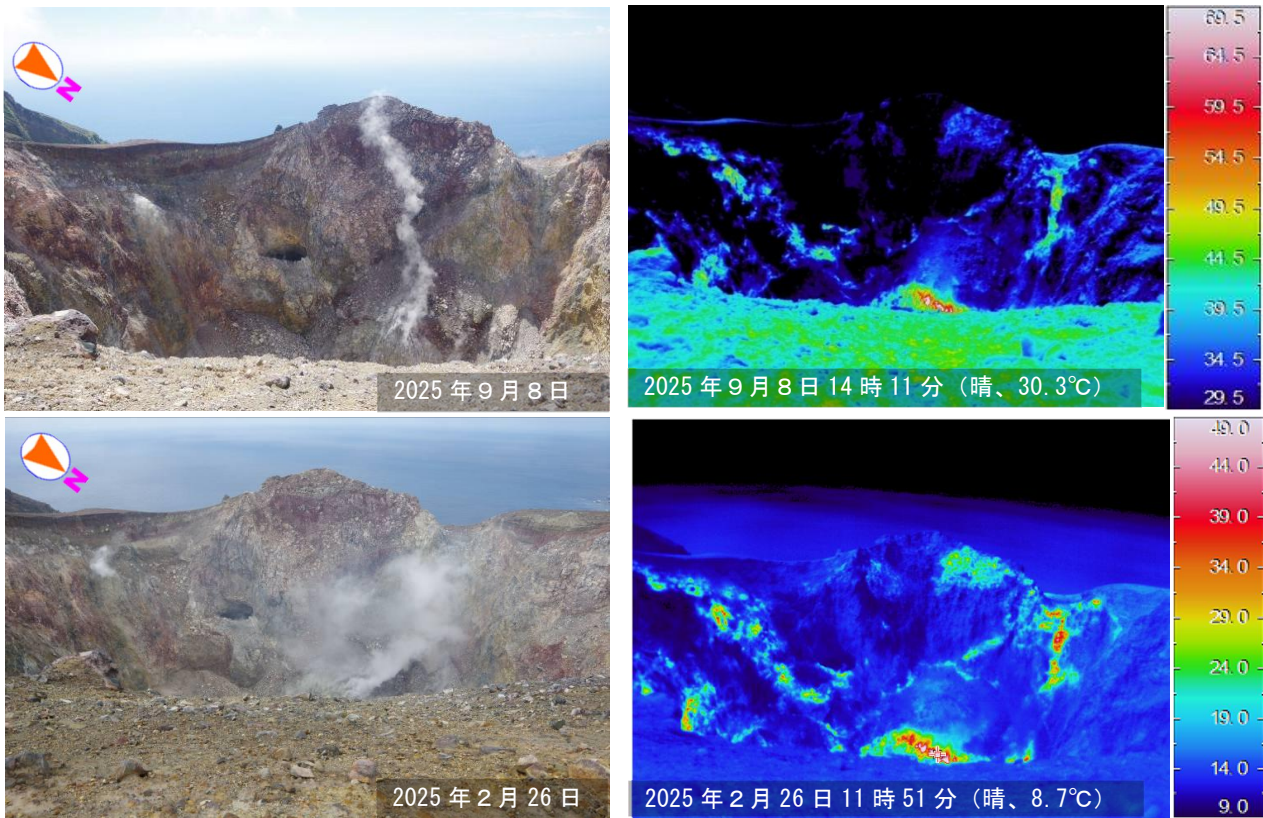


図 2-3 口永良部島 新岳火口内の状況（新岳火口縁北東側より撮影）

9月7日から9日にかけて山上で実施した現地調査では、新岳火口内に地熱域を引き続き観測しました。地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。また火口内に留まる程度の噴煙を確認しました。噴煙活動に特段の変化は認められませんでした。

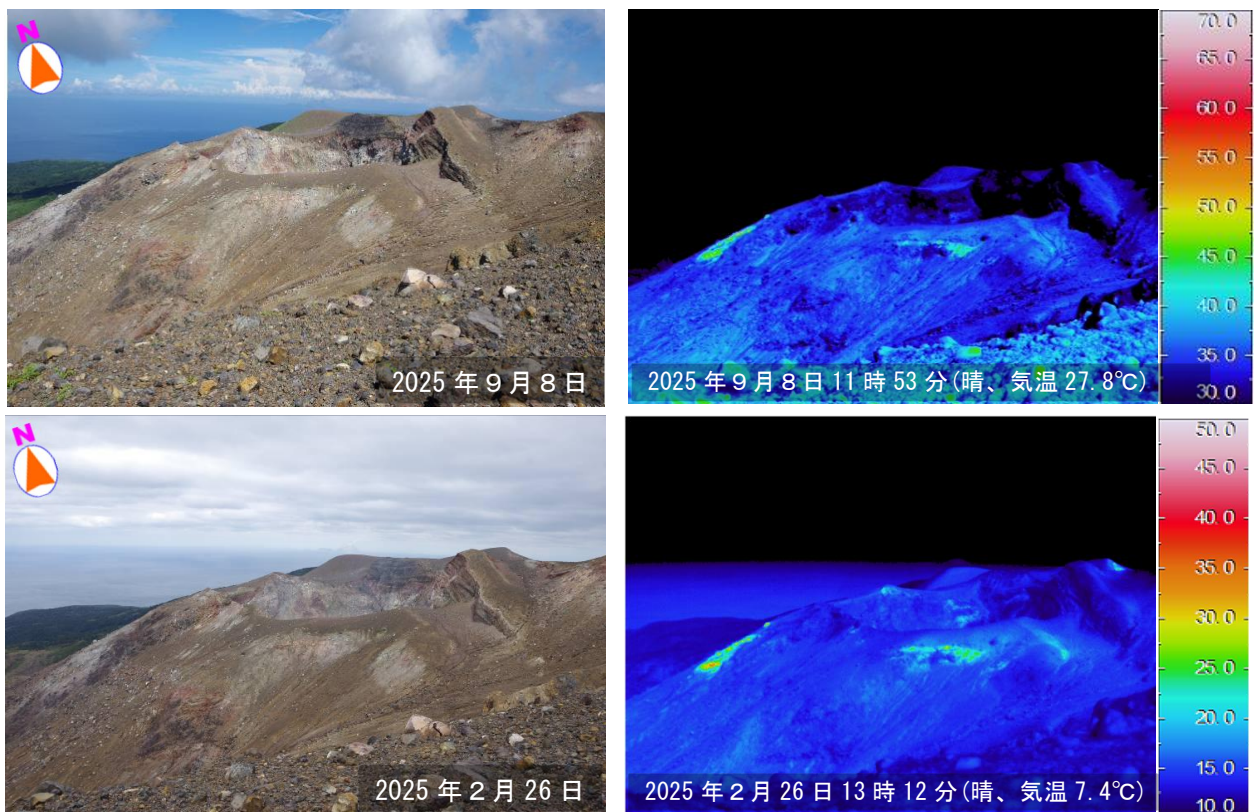


図 2-4 口永良部島 新岳火口南側斜面の状況（古岳山頂付近から観測）

9月7日から9日にかけて山上で実施した現地調査では、新岳火口外壁南側及び火口西側割れ目付近の地熱域を引き続き観測しました。地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

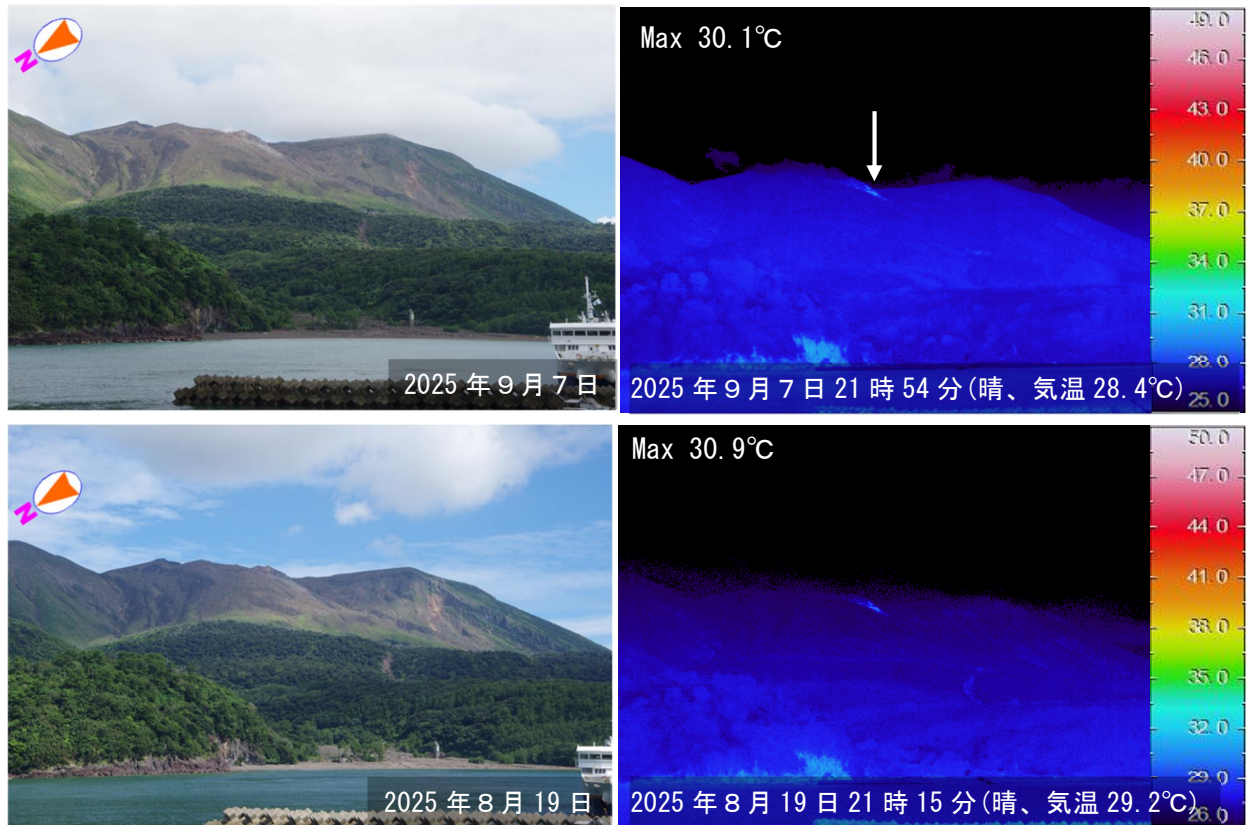


図 2-5 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

9月7日から9日にかけて山麓で実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近で引き続き地熱域（白矢印）を確認しました。

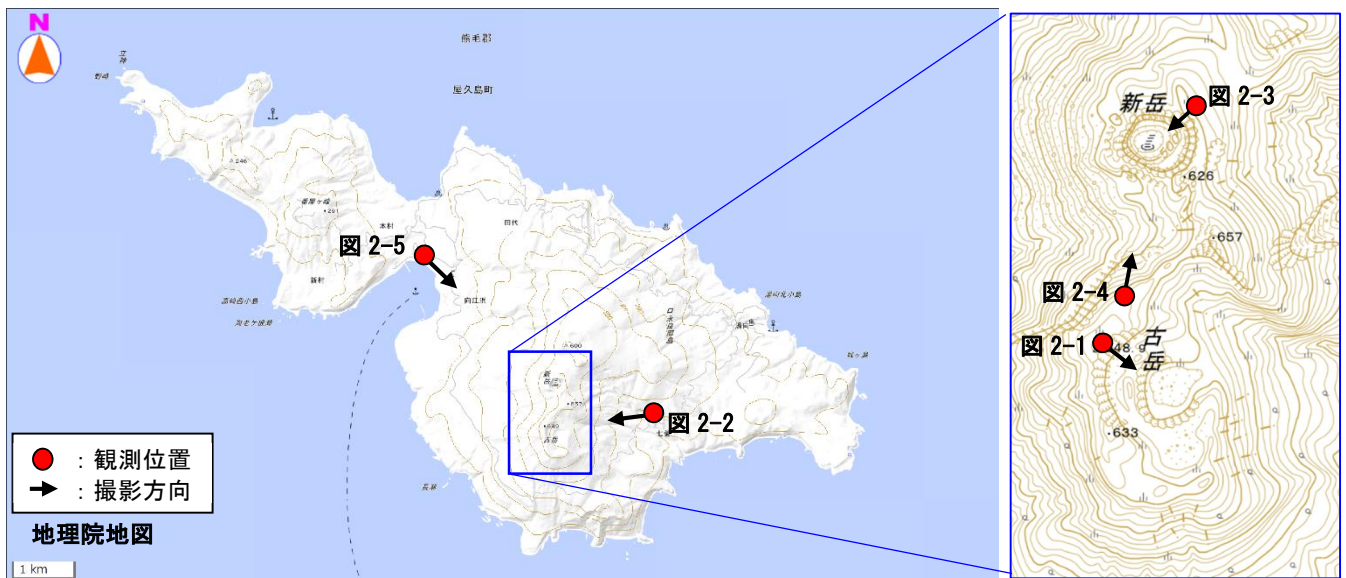


図2-6 口永良部島 観測位置及び撮影方向

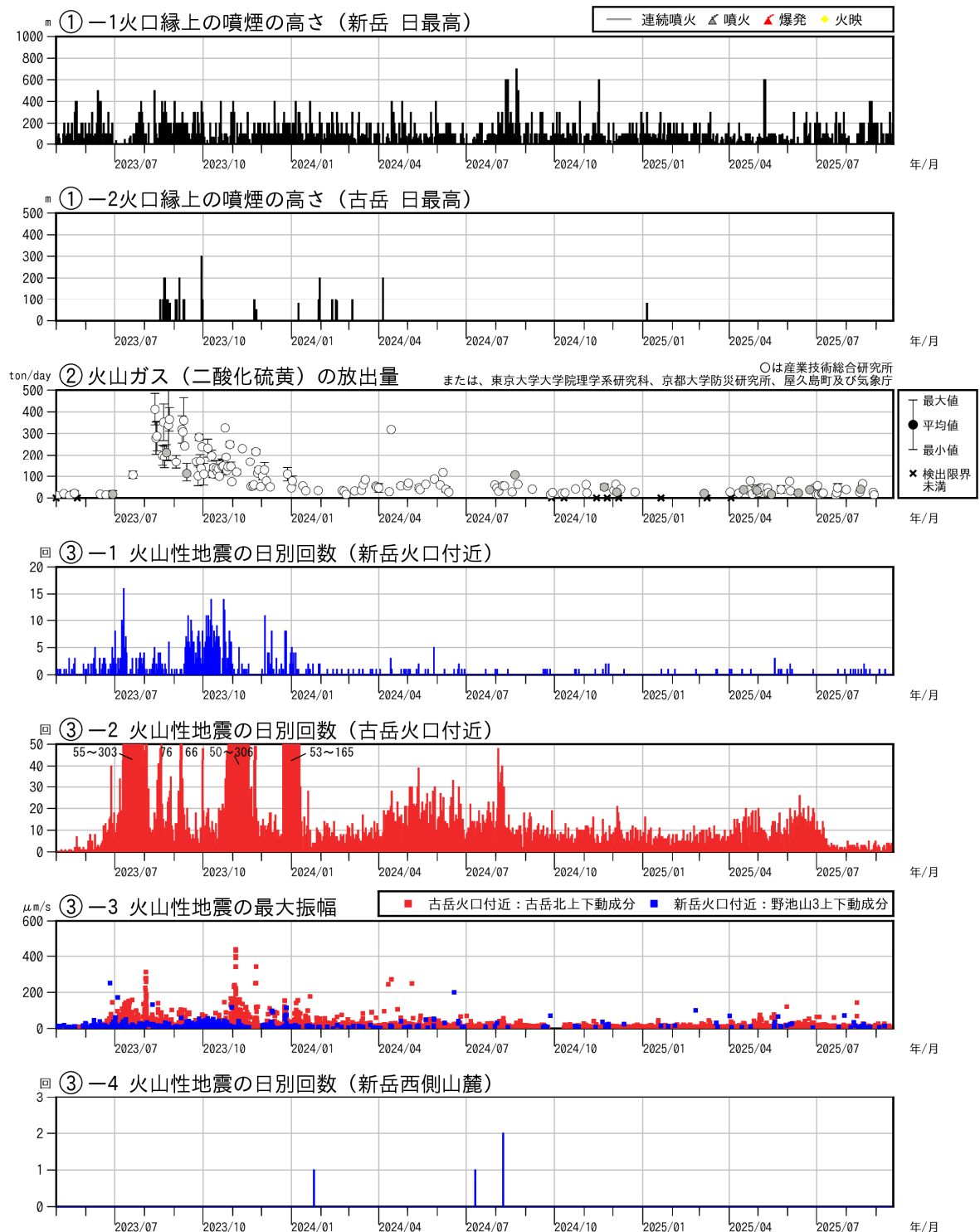


図3 口永良部島 最近の火山活動経過図（2023年5月～2025年9月18日）

<2025年8月以降の状況>

- ・噴煙の状況に特段の変化はなく、新岳では白色の噴煙が最高で火口縁上400mまで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、8月以降は1日あたり20～70トンと少ない状態でした（8月30日の観測では1日あたり20トン）。
- ・4月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7月頃から減少し、少ない状態で経過しています。
- ・古岳火口付近、新岳火口付近、共に振幅の大きな火山性地震は発生していません。
- ・新岳西側山麓付近の火山性地震は発生していません。

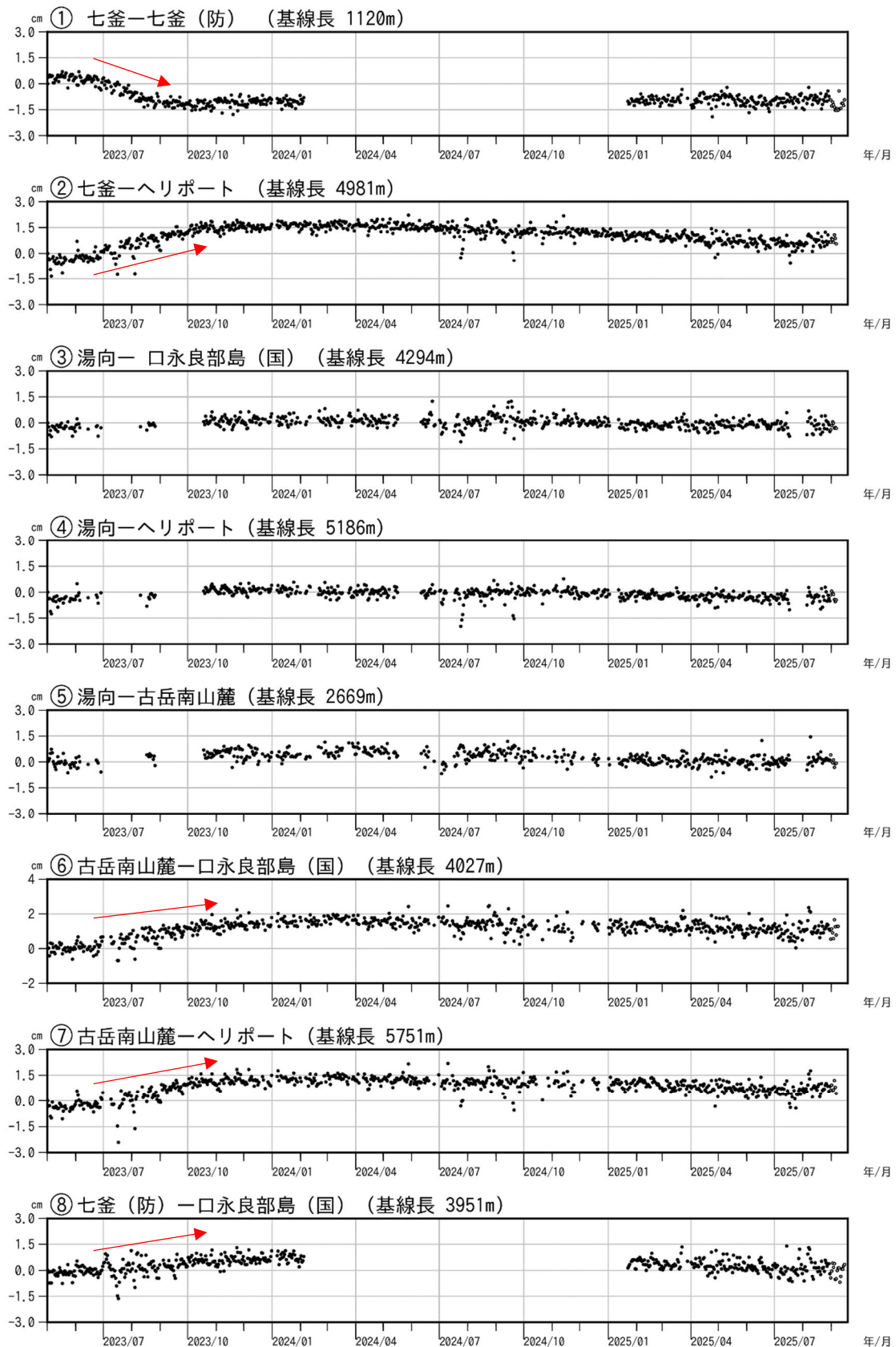


図4 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2023年5月～2025年9月18日)

GNSS 連続観測では、2023年6月下旬頃から同年10月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動(赤矢印)が観測されていますが、その後更なる膨張を示す変化は認められていません。

これらの基線は図5の①～⑧に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

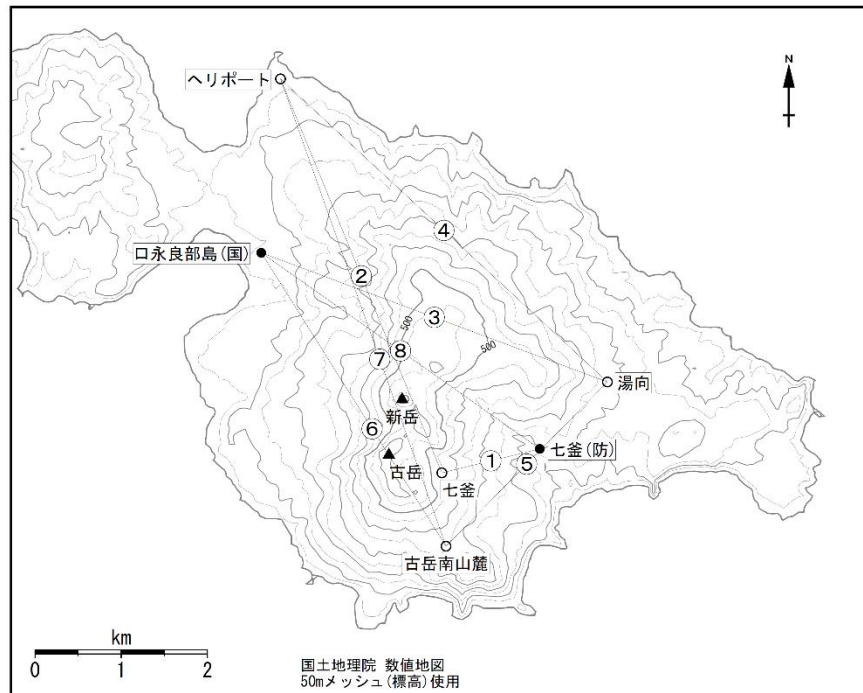


図5 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所

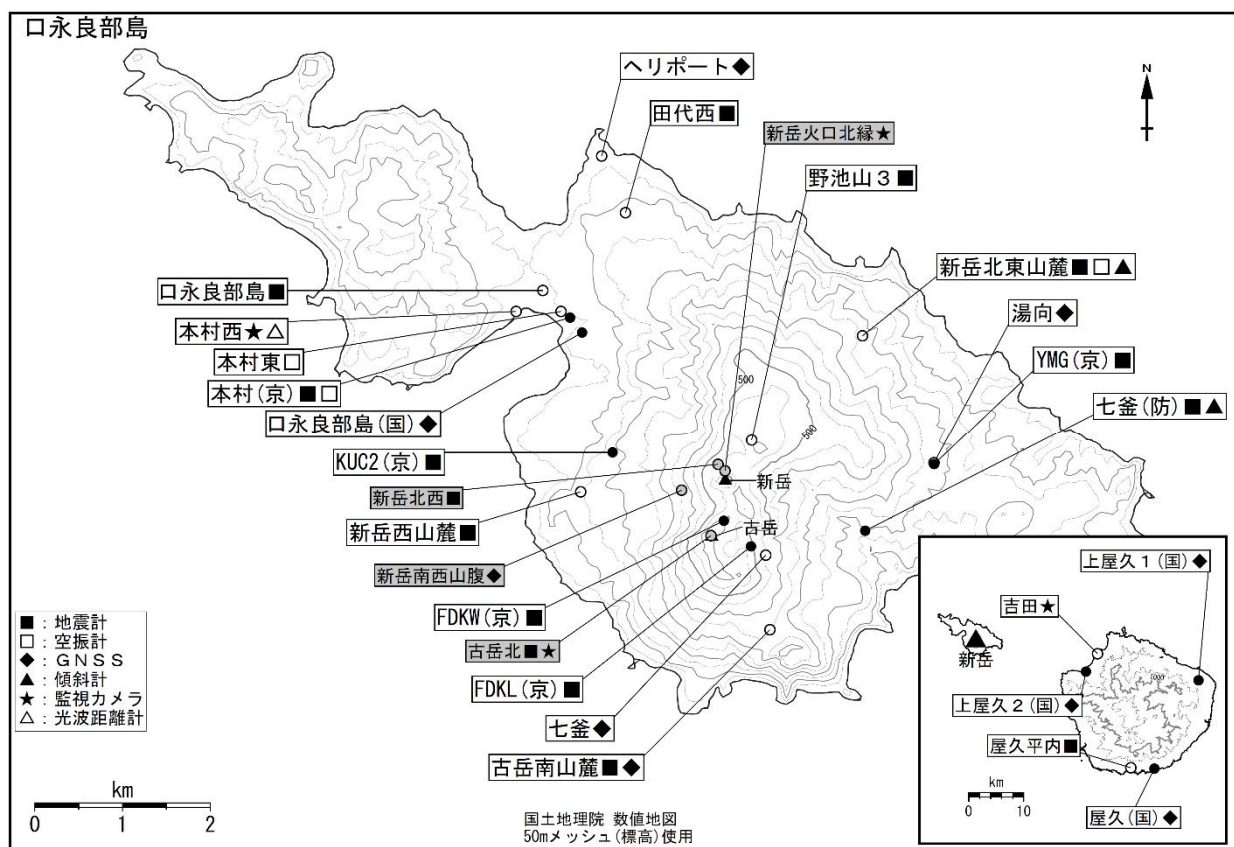


図6 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(京): 京都大学、(防): 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。